

(2) 本研究における表現及び鑑賞の指導の考え方と具体的手立て

新学習指導要領の指導計画の作成と内容の取扱いによると、「題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ること」⁽²⁾と示されています。

図画工作科における「主体的・対話的で深い学び」を実現するにあたっては、児童が発想や構想をする場面、創造的な活動の中で技能を発揮する場面、作品などからよさや美しさを感じ取る場面において、「造形的な見方・考え方」を働かせるような指導が重要になってきます。奥村高明(2016)は「造形的な見方・考え方」は〔共通事項〕が児童において十分に活用された姿として見ることができる⁽³⁾と述べています。

また、中教審芸術ワーキンググループにおける取りまとめにおける学習過程のイメージ(その2)に表現と鑑賞を往還しながら資質・能力を育成する様子が図1のように示されています。

生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる児童の姿を実現していくためには、これまでの図画工作科の学習を、表現と鑑賞を往還し、「主体的・対話的で深い学び」の視点で改善・充実を図っていくことが必要になります。

一方、検証授業をするクラスの児童の事前実態調査で、「図画工作科の学習で困ることがあるか」という質問に「困る」「困ることがある」と答えた児童に対して、「どんなことで困っているか」と尋ねると、「イメージ通りにならない」「イメージが決まらない」「何をかいたり、つくったりしてよいか分からない」という、発想・構想の段階で困っていると回答した児童が88%を占めていました(図2)。そこで、自分の思いと表現活動をつなげる手立てを考えることにしました。竹内とも子(2002)は「子供たちが自分の思いを自分らしい方法で主体的に表現するためには、多様な造形表現の活動の場を工夫することが重要である。(中略)鑑賞活動は、単に作品を眺めたり、感想を述べ合ったりすることにとどまらない。自分が表現したことと関連性を考えたり、鑑賞する対象や鑑賞の仕方を工夫したりするなど、多様な鑑賞活動が考えられる」⁽⁵⁾と述べています。様々な鑑賞活動を仕組むことで、発想や構想につながり、前述のような児童の困り感が解消されるのではないかと考えます。

これらを鑑みて、本研究の考え方を次頁図3のように表しました。1つの題材の学習過程を鑑賞活動と表現活動を関連付けながら構成し、造形的な見方・考え方を働かせるような場の設定を繰り返すことで、見方・考え方や図画工作の目標である3つの資質・能力が育成され、そのような題材構成を積み重ねることで、生活や社会の中の形や色と豊かに関わる児童が育成されていこうと考えました。

その具体的な手立てとして、以下の2つに取り組みました。

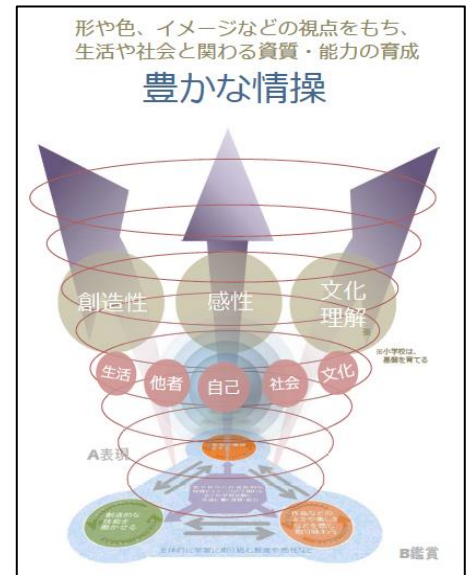


図1 図画工作科、美術科、芸術科(美術、工芸)における学習過程のイメージ(その2)⁽⁴⁾
図をクリックすると拡大します

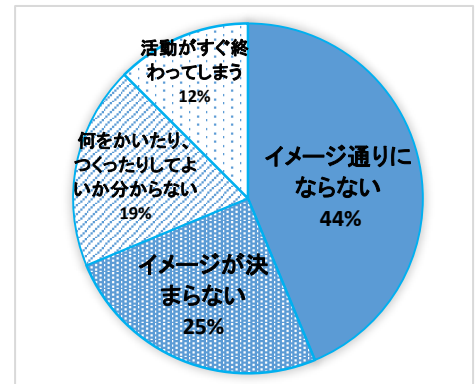


図2 質問「どんなことで困りますか」

① 表現活動に生かすための鑑賞活動の段階的な設定

まず、題材と出合わせる場面（図 3 A 段階）で、題材のよさや美しさを実感させる鑑賞と、実際に表現活動に使う素材鑑賞を行います。児童が自分の活動を確かめたり振り返ったり、また自分の意思で材料や表現方法を決定できるようにします。次に、表現活動の途中で、個人やグループで中間鑑賞（図 3 B 段階）を行います。自分自身や友達との対話を通じて、互いの作品のよさや違いを見付ける対話活動を取り入れた鑑賞活動にします。中間鑑賞をもとに、さらに表現活動に取り組みます。最後に、仕上がった全員の作品を、どのように展示するのか、並べ方について話し合う作品鑑賞（図 3 C 段階）を行います。

表現活動や鑑賞活動をする際に、〔共通事項〕の(ア)形や色などをとらえること、(イ)形や色などをもとに自分のイメージをもつこと、この2つを意識するような言葉掛けやアドバイス、鑑賞の視点としてもたせます。鑑賞活動の時には「みたい」と、表現活動の時には「つくりたい」という思いを、また鑑賞活動の後半には「早く表現したい」という思いをもつように、ワークシートを工夫します。そうすることで、鑑賞活動と表現活動がスムーズに結び付くと考えられます。

このように、鑑賞活動を段階的に表現活動の間に入れる題材構成を仕組みます。また、これらの鑑賞活動を行うに当たって、場の設定を工夫します。（(3) 授業実践 で示しています。）

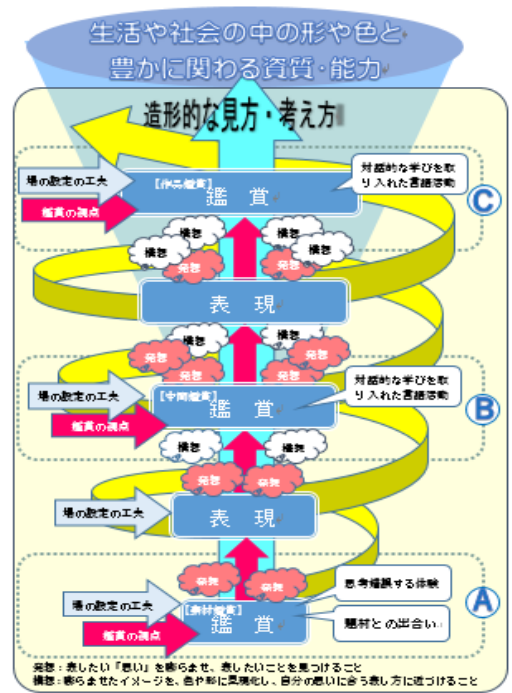


図 3 本研究のコンセプト図
図をクリックすると拡大します

② 図画工作科の学習と生活や社会をつなげる手立て

図画工作科で学んだことが生活や社会の中で豊かに関わっているという実感を持つための手立てとして、題材のゴールに学校外に展示することを常に意識させます。相手意識をもつことで、相手の方が喜ぶように、元気付けるようにという思いをもったり、相手の見え方に配慮したりすることができると考えます。思いをもったり、見え方に配慮したりする際に「造形的な見方・考え方」を働かせると思われま。また、学校外に児童の作品を展示する機会を設けることで、児童の造形活動の意味や価値を広く伝えることができます。